

日本現代中国学会の存在意義を考える

理事長 瀬戸宏（摂南大学）

今回多くの方々、特に佐々木信彰前理事長の強いお勧めと推薦により、日本現代中国学会理事長を務めさせていただくことになった。極めて微力なので、会員の皆さまのご支持、御協力を切にお願い申しあげたい。

これを機に、また一昨年来『資料・日本現代中国学会の 60 年』を編集していることもあり、学会の在り方について改めて考えることが多かった。

四月刊行予定の『資料・日本現代中国学会の 60 年』をみれば理解していただけると思うが、1951 年の創立から 1979 年頃までの約三十年間、現代中国学会（以下、現中學會と略記）にはかなり強い傾向性があった。これは、当時の中華人民共和国の姿勢と日本の社会状況によってもたらされたのである。しかし現中學會は学術団体としての性格はあくまで保持していた。そのため 1966 年からの文化大革命の影響で現中學會と同傾向の研究・交流団体が次々に分裂していく中で、現中學會は分裂することはなかった。この歴史は、誇りとすべきであろう。

その後、中国の変化に伴う現中學會内の実証研究重視と中国研究者人口の増大で、1980 年代以降、現中學會の会員数は増加を続けた。80 年代初期には 300 人程度だった会員数は、今日では約 700 名に達している。現中學會は現代中国に関する総合的学会として、大きく発展しているといっている。

しかし、現中學會を取り巻く問題も多い。現中學會の周辺には、後発の専門別に細分化された中国関係学会がいくつもある。大学を単位とする政府関係の大型学術助成もある。このような中で、現中學會の存在意義がぼやけてきているのである。この問題にどう対処したらいいのだろうか。

第一に言えることは、学会は研究者の自発的な交流の場であるから、何よりも会員の参加・研究発表意欲を促す円滑な学会運営に努めることである。理事長はじめ学会役員は、まず会員への奉仕者の立場で学会運営にあたらなければならないと思う。

今日、現中學會が一つの自覚的傾向性を持つことは難しい。中国の姿勢が変わっただけではない。中規模学会に発展した現中學會は、現代中国に対して各分野のさまざまな考えをもつ研究者が集まるゆるやかな集合体になっており、それを特定の傾向性、方向性でまとめることが困難になっているのである。

そんな中で、会員が学会の必要性を感じ失望感を持たないためには、現中學會が學術団体として正常に運営されることが、まず必要であろう。当たり前のことのようにだが、これまでの経験では、これ自体が相当な努力を必要とするのである。

第二に、現中學會の存在を内外にアピールする企画も定期的に考えていく必要がある。2009年に刊行した『新中国の60年—毛沢東から胡錦濤までの連続と不連続』（創土社）や四月刊行予定の『資料・日本現代中国学会の60年』は、このような意図をも込めて企画されたものである。学会の存在感を示すことが、会員の参加意識や成果発表意欲を高めることも、事実であろう。

第三に、現代中国に関する総合的、学際的学会という現中學會の特徴をいっそう強めていくことである。それには、全国大会の共通論題や時々のシンポジウムなどの内容設定が重要になってくる。

ここで現中學會が文学芸術を研究分野に含んでいることの意味を考えてみたい。中国を対象とする地域研究の学会は他にもある。しかしそれらの学会と現中學會との間には、実は大きな相違がある。現中學會は文学芸術を対象に含むが、他の地域研究学会はそうではないのである。現中學會がなぜ文学芸術研究を含むかは学会の成立過程を考えれば答えは出るが、この点は今は触れない。現中學會は1957年第6回大会、1966年第16回大会と二回にわたって魯迅をテーマとする共通論題を開催してきた。作家が共通論題の主題となることは、中国関係の他の地域研究学会では考えられないことであろう。

残念ながら文学研究者自身も含めて、現中學會が文学芸術研究を含む意義が学会内であまり感じられていないようにみえる。共通論題が半日に圧縮されたためもあるが、全国大会共通論題から文学芸術がはずされることが近年多い。それに対する不満の声もあまりあがらない。

一つには、日本・中国に共通する文学の地盤下があろう。現代中国文学芸術が、魯迅以後世界的影響力を持った作家・芸術家をあまり産み出せていないこともあげられよう。さらに、私を含めて現代中国文学芸術研究者が他分野の現代中国研究者の関心をかき立てる研究を行い得ているか、という問題も指摘されなければならないであろう。

学会だけでなく、現代中国に関する政府大型学術助成でも文学芸術研究が外されている場合が少なくない。だが、文学芸術が多くの現代中国研究者の視野に入らない現状は、はたして好ましいことなのだろうか。現代中国人の魂と感情の表現に対する洞察を欠いた現代中国研究は、私にはどこか脆さが感じられる。

現代中国の総合的・学際的学会としての現中學會を今後どう発展させていくか。すぐには答えの出ない問題ではあるが、これから二年間私なりに模索していきたい。